日本人の排外意識に対する過去の移民規模の影響の分析

「国勢調査」と「国際化と市民の政治参加に関する世論調査」に基づく分析

日本学術振興会特別研究員 DC1 東北大学　龚　順

1　目的

文化の持続性について、様々な研究から検討された。また、社会学では、Bourdieu を始め、長年にわたる文化の行動、意識、価値観に与える影響が取り上げられた(Bourdieu 1979; Lamont and Molnár 2002; Swidler 1986)。しかし、既存の研究では、文化の持続性から、過去の文化の長期的な人々の意識などに与える影響は検討しなかった。本稿では、過去の移民規模を文化として扱って、文化の意識に与える影響の研究を発展し、文化の長期的な影響を明らかにするのを目指す。

2　方法

日本は、1980 年代から、新しい移民政策を導入し、移民を受け入れていく。そのため、歴史的な移民は、1980 年以前の移民を指すべきである。そのため、本稿は、1920 年、1930 年、1950 年、1955 年、1960 年、1965 年、1970 年、1975 年における国勢調査の移民のデータを過去の移民として扱って、それらのデータを「国際化と市民の政治参加に関する世論調査」の個票データと合併し、過去のそれぞれの年の移民規模は、今の排外意識に与える効果を検討する。

3　結果

分析の結果では、過去の移民規模の高い地域は、外国人に対する好感度が高いことが分かって、過去における移民文化の持続的な影響を明らかにした。

4　結論

まず、日本における移民また排外意識の研究では、1980 年代以降の移民に注目し、戦前から、1980 までの移民規模と分布を不明のままである。本稿から、1980 年代以前の移民のデータを可視化し、1920 年から、現在までの移民の分布の時代変化を明らかにした。そのため、日本における移民歴史へ理解を深める。

また、社会学では、蓄積の文化の意識、行動に与える効果の研究に貢献し、文化の意識、行動に与える長期的な効果を計量データで、確認した。それによって、歴史的な視点から、排外意識の規定要因への理解を深める。

文献

Abbott, Andrew, 1991. “History and sociology: The lost synthesis,” Social Science History, 15(2): 201-238.

Allport, Gordon W, 1955. The nature of prejudice. Cambridge, Mass: Addison-Wesley Pub. Co.

Blumer, Herbert, 1958, “Racial Prejudice as a Sense of Group Position,” The Pacific Sociological Review, 1(1): 37.

Bourdieu, Pierre, 1984, Distinction: A social critique of the judgment of taste. Cambridge: Harvard University Press.

Lamont, Michèle, and Virág Molnár. 2002, "The study of boundaries in the social sciences." Annual Review of Sociology, 28(1): 167-195.

Swidler, Ann, 1986, "Culture in action: Symbols and strategies." American Sociological Review,51(2): 273-286.

永吉希久子, 2012,「日本人の排外意識に対する分断労働市場の影響―JGSS-2006 の分析から」『社会学評論』63(1): 19-35.

Quillian, Lincoln, 1995, “Prejudice as a Response to Perceived Group Threat: Population Composition and Anti-Immigrant and Racial Prejudice in Europe,” American Sociological Review, 60(4): 586-611.